

る人なし。藤村太郎右衛門は越後が家來にて、眞田丸にて働有之、昵近に被召出。此太郎右衛門へ小幡事を尋ねけれども、會て不知といふ。石川丈山初は嘉右衛門と云ふ。御旗本より微妙公御陣へ御使に來り、御家の先手へ加り高名し、微妙公御言葉被懸たるよし、三河記十四之卷丈山傳に見えたり。然れども御家にては見たる者も、聞たる人もなし。生駒八郎右衛門は、微妙公御幼年の時御兒小姓を勤め、京都にて遊女町へゆき喧嘩し出し、其首尾は悪敷もなし。然れども悪所の儀御法度の筋にて御知行御取上被成。然る所夏陣の時大坂の城へ入、四月二十九日瑞園右衛門・山口大學等と一所に、住、江へ出で大なる働したるよし申けれども、其味微妙公善々御合點にて、其後御國へ立歸りけれども、少し扶持被下置、終に御知行とは不被下候。微妙公薨去の後、保科肥後守殿へ善きつてを以て、大坂の事鬼の様に申上げ、肥後守殿よりの仰にて千石御知行被下候。いつはり過言もにて、御家に人も無きやうに申候は、其時節大坂にて覺の者は皆死亡しぬれば也。されども能く聞覚えたるものありて云様は、八郎右衛門五月六日未明に大坂表をはづし、

御家の陣小屋に隠れ居たるに慥に逢たるといふあり。四月二十九日住、江にての働は無證據事也。其身申度まゝの過言ものにて如此。されども不案内の若きもの共は、信と聞て世上へ流布せり。かりそめの物語にも、只武邊の儀はそへなのこすな有様にいへとあり。恥敷事共也。關原政務誌。

一、岩石城一番乗の人々

天正十五年四月朔日、瑞龍公及蒲生氏郷・丹波少將等豊前國岩石城攻。城主長三郎左衛門固守之。然共終に落城。此時河原兵庫・大平左馬・坪内次左衛門三人、氏郷の臣蒲生源左衛門・蒲生五郎兵衛・名護屋山三郎三人以上六人、城乘一番にて城内にて鎗合高名す。太閤の御前へ被召出各金錢を賜はる。太田但馬守其時書平次と云。松平久兵衛傳人一番乗と氏郷記にあり。

一、丹羽長重小松の領知被召上

慶長五年七月二十七日瑞龍公金澤御出陣、八月三日大正持城へ御取懸也。餘橋へは利政公かゝり給ひ、利政公自身御出陣と云。搦手鐘丸へは瑞龍公御かゝり、即日落城す。八月七日三堂山へ御引取、御幸塚に諸將を殘し置て八日に引上げ給ふ。此時小松より江口三郎右衛門大領へ出張し、長九郎左衛門

手へ仕掛、松村孫三郎のつきり、長が士どもを乗倒す。淺井暇一卷に見えたり、略之。九月十五日關原落去の左右ありて、小松城主丹羽長重降參也。但小松懸橋の上にて長重御禮あり。公には胡床に腰を懸られ、長重は上下にて御禮、其弟左近を質に出し岡島備中預之。此方より微妙公御幼年の時にて質に御越被成、坂井與右衛門宅に被成御座候。其後長重御先手へ加り御上京有之、色々御詫言被仰上候處、徳川公御承引無之、長重小松の領知被召上候。

一、淺井源右衛門の殉死

淺井源右衛門一政平生子供へ申しけるは、袴の緒の結様粗相成は悪し。心を付けて念を入れて結び、其餘はしかと挟みたるよしと云ふ。陽廣公薨後に殉死の時、袴二つ着たるに上をばぬぎ、下に着たる白袴に袴を着、其緒をしかと結び両わなにし、とくと引合兩方を挟み、扱推はだぬき自殺せり。死に臨て常言を不失、從容として見事也。

一、寛永行幸の時微妙公御召馬

寛永行幸の時、微妙公御召馬、今日ほどの天晴は無之候。天下の名馬に候間、小龍に被召可然とて、御裝束にて被召け

り。小龍は馬場にてはやき事鳥の飛ぶごとくにて、無雙の名馬ながら、鞍あらく輿がまへ悪しく、御裝束もめ、御後より散々見苦しくありし。天下の見物といへども、被召替事もならず不興也と。伊藤内

一、高德公・秀吉公御夫婦互に入憫の事

高德公御小祿の時太閤も小身、互に尾州に被成御座候頃、太閤の奥方は高德公の御媒にて御嫁娶、又芳春夫人は太閤の御媒にて御婚禮なり。依之御夫婦共に互に入憫也。安土城下にて屋敷をも隣並に御請取、相互に無餘儀被仰通候。依之公は本勝家の旗下たりといへども、柳瀬敗軍の時公は不破彦三と府中城内に被成御座候處、太閤何の沙汰にも不及、又左と我等は筋目有之間、無事の儀は不可有仔細とて、あなたより和談御こひ、府中の城へ御入被成候。然共公は御對面難成とて達て御斷被仰違候處、秀吉公、是非とも只今御對面被成度候。末々少しも御如在るまじ。賀州にて二郡可被遣としてしきりに被仰入候。此うへはとて、俄に公は御落髮被成候て御出座也。太閤御覽じ、扱々御律義なる体哉とて御感涙被成、追付御歪事被成候。此時不破彦三には太閤